国木田独歩の佐伯での生活（四）

山内武麒
（賛助会員・佐伯市城下東町）

十四日の記には

夜已に更けぬ。吾今坐して青燈の下に在り。

洪水去りて天地ひとしほ寂莫を加へぬ。暗夜、風声しきりにして雲漠々たるを思ふ。滴々の音自から幽なる者之れ雨声に非ずや蟋蟀（こおろぎ）の音亦た何にか聞かる。

と、書き出してある。大時化（しけ）の後の寂しさを叙してある。この洪水は十七日の記にも記してあるが佐伯地方に大洪水があった。十月九日の午後から雨となり、十三日の夜台風が襲来して暴風雨となり、とうとう出水した。この洪水のために池船橋は流失してしまったのである。

次に「吾再び繰り返さんかな「されど憐れむ可き人性」。嗚呼 Poor human nature」と十三日の記の最後の言葉を繰返して、人の性質性格の弱点をついている。

われわれは毎日何を為し何を思い何を企て何を望んでいるか。

何もしない日、思うことのない日、望みない日はずんずんと過ぎて、たゞ今日だ明日だとむだに送っている。憐れむべき人性である。

うつ勃と心の中に色々と考えるが何と書けばよいか解らない。たゞ自分で立ち自信を持ってしなければならない。

しかし憐れな人の性質、弱く愚ろかである。鈍は、すぐ自信を失なってしまう。

何故か、人性とはこんなものか、そうであれば人生は空である。それは、

神を思はざるの罪のみ、罰のみ。人生は空に非ず、賞と罰也

と、神にすがっている。これも反省録である。

十七日の記には洪水のことを書いてある。

雨、始めて晴れて天地再び光の衣を被る。計算すれば一週間の降雨なり。先週、月曜日の午後より始め、今朝に至りてはじめて日を見る。金曜日の夜より大雨と強風と起り土曜日に大洪水来る。其の日十時十一時頃を以て満潮の時となし、最も洪水の甚だしき時なりし也。

と、ある。相当烈しい時化であったらしい。

毎日授業は続いている。読書する暇は殆んどない。時々思索に耽っている。それで精神上の糧を欠がさないでいる。

しかし、自分には教えている生徒がある。交際している有志家があり、なつかしい友があり、考えねばならない両親と弟がある。これらが現在自分の周囲にある社会的関係である。自分の世間的な関係にある。

門を出ると小さい町がある。郊外に一歩出ると青々とした山河があり、茅屋根の家があちこちに点在し、空を仰げば大空が広々と連なり、尽きない自然が黙々として取り巻いている。これが自分にとっての超然的関係であり出世間的な関係にある。自分は今こゝに立っている。自分のかゝわる関係はこのようである。

自分を苦しめるのはこの関係に処していく道である。多くの煩わしいことはともすると社会的関係から起り、云うに云われない悲しみはどうかすると超然的関係から発する。

俗慮に在らざれば幽愁、幽愁に在らざれは俗慮

である。まだ本当の満足の中に住むことが出来ない。真実な平和の中に居ることが出来ない。まだ十分に自分自身をこの大自然の中に神聖な霊の中央に見出すことが出来ない。まだ十分に自分のソール（霊魂）を考えることが出来ない。だから他人のソールを考えることが出来ない。まだ毎日々々の束縛から脱することが出来ない。

以前からこのようにある。だから精神が休まる時が少ない。

と、自分を囲む関係を社会的世間的関係と超然的出世間的関係に分けて考えて、それらの関係と処していくのに苦んでいると述懐している。

この日、収二と一しょに坂の浦まで散歩している。

今日は新嘗祭（神嘗祭の誤り）で休日であったので、午後収二と一しょに城山の後ろより下村（鶴岡村）の山

谷をわたり、小さい坂を越して坂の浦という海浜に出た。それから山の麓が海と接している断崖の下の岩浜をたどって葛港の波止場に出て帰宅した。

路に草刈る乙女の群を見、畦を行く夫妻の農夫を見、谷間にあつまる小村を見、渓流を見、紅葉を見、嶋嶼を見、碧海を見、白帆を見、漁舟を見、長へに送る夕陽を見たり

と、行く道で見たものを記してある。

自分はそれらの美しさを認めないではない。しかし一種の悲しみからのがれることが出来ない。調和を失ったようであり、絃線が切れたようであり、泉流が枯れたようで、自分の心のうちは少しもあき足らず、何ものも見ることが出来ない何の幕か前頭に垂れ下っているように感じた。言い換えるとミュース（音楽の女神）の一曲も聞くことが出来なかった。と、省みて自分に問うている。

何故か？　それは自分が純全でなく、シンセリテイでないからである。全然その見るものを神聖な世界の中に見出すことが出来ないからである。と、反省している。

以上が坂の浦への散歩記である。城山の後の白潟から山のすその道を通って坂の浦へ通じる道に出て行ったのである。以前はこの記にあるように小さい坂を越していた。今はこの坂はけずり取られて広い道路が通じ車が頻繁に通っている。昔は坂の浦は農家ばかりで湾には漁船が来て網を引き魚を釣っていたが、今は造船所が建ち並んで、昔の面影は全く無くなった。

今日は旧暦九月八日で月がようやく美しくなった。夕暮収二と郊外に出ようと家を出て途中で薬師寺育造氏という、この地の基督教会の監督者と出会った。自分の宅を訪問しようと出掛けたという、それで一しょに散歩した。行く行く当地の教勢について聞いた。

二十日の記には

月已に落ち夜已に更け渡りぬ。日々の職業は日々務られぬ。一の決心あり。そは此の度心ならずも受任せし此教師の職を責任ある大任と信じ青年を感化することに力を尽す可し。との決心なり。

と、堅く決心している。教職を責任ある大任と自覚し、生徒の教育感化に全力を尽す。との決心である。

独歩は授業に頗る熱心であった。大正三年六月二十八日の佐伯自治新聞六十五号に「今昔物語」と題する記事

の中に独歩のことを載せてある。その中に

教授ぶりはどうかと云うと、激しい方で随分練り上げる方であったと云う。習らったところを知らないと云ったら大変なもので、そんな筈はないと目をむき出して叱ったという。これについて逸話が残っている。話は中谷有隣氏が指名されて分りませんというと、先生「そんな筈はない。やってみよ」と聞かない。「全部分らないのか」と聞くと「そうです」とやる。そこで先生は大いに叱責すると、一服流の有隣氏は憤然として起ち上り「習いません」といってスタスタと帰ってしまったという話である。

独歩氏の気象はきかぬ方で負けず嫌いだから、生徒の方からぶっつかって来ないと気に入らぬ。処が生徒のぶっつかり様が少なく、どちらかと云えば先生から突込まれるという風で、手応えが無かったものか、何時も佐伯の青年を攻撃していた。自分の郷里の青年と比較してよくその無気力をやかましく云っていた。結局これは佐伯の青年を大いに激励するつもりであったが、これが後に生徒の反感を買う原因ともなった。

独歩氏は非常な勉強家で閑さえあれば本を読んでいた。生徒が氏を訪問すると、何時も書架から書籍を抜き取り、「僕は昨夜こゝからこゝまで読んだ。ちょうど幾頁ある。」などと云うのが常であった。これも勿論生徒を激励する考えであったろうが、又一つには勉強家であったのでその読破したと云うことが楽しみであったのだ。書架にはウォーズウォースの詩集やエマーソン、カーライルの著書が並んでいたが、談話は主に修養上に関する話であった。独歩氏の生涯中佐伯に滞在していた時が最も真面目であったという。当時最も厳格なクリスチャンであった。

と、ある。独歩の人柄の一面をうかゞえる、このように独歩は正直で真面目であったが、また一面負けず嫌いな烈しい気象の持主でもあったらしい。

（つづく）